

貨幣の交換可能性の拡張としてのデジタル情報 ～基礎情報学の情報概念を用いた論点整理～

棕本 輔（デザイン事務所代表／鶴見大学／二松学舎大学／京都芸術大学）

発表要旨：

本発表では、貨幣という概念をめぐる記号的・経済的な観点からの議論を「価値の交換」という問題系において、デジタル情報についての意味論的・システム論的な議論と接続する。それによって、人工知能（AI）が人間と取って代わるか否かといった個別的な問題に限らず、デジタル情報技術の社会的な全面化により生じている「価値」をめぐる問題について、幅広く具体的に考えるための論点整理をめざす。

『資本論』を主著としたカール・マルクスによる経済についての総合的な議論は、経済的な価値は如何に生じるのか、またそれは如何にして交換されるのか、についての根本的な考察を基礎として成立している。その具体的な政治・国家といった形への応用については、二十世紀にかけての世界的広がりとは退潮、そして二十一世紀に入ってからデジタル情報技術も関わる富の集中への批判理論としての再評価など、毀誉褒貶が激しい。しかし、その経済的な価値と交換をめぐる精察自体については、経済のあり方すなわち価値交換のあり方についての主義主張の次元を超えて、学問的に肯定的あるいは批判的に参照し、また発展させた議論が連綿と続いている。

一方で今日の具体的な問題は、例えば AI システムによって生成されたデータや、ブロックチェーンのトークンといったデジタル情報と、人間による様々な営みとの価値をめぐる関係の問題、換言すれば意味の問題として現れている。そうした問題の本質を捉えるためには、所与の記号的イメージとしてのそれらが、どのような「商品」なのか、あるいは「貨幣」たりえるのか、といった既存の概念との対応関係を考えるだけでは不十分である。求められるのは、そのような問いの対象としての、デジタルデータ／デジタル情報という（極めて特殊な）意味や価値の形態についての根本的な考察である。

そのために本発表では、情報学において価値すなわち意味の形態として情報概念を精緻化した理論体系（ネオ・サイバネティクスの一環を成す基礎情報学）を中心として、記号学・記号論の諸概念とデジタル情報処理との関係について精察した先行研究などを踏まえる。そして、「貨幣の交換可能性を拡張するもの」としてのデジタル情報の性質・特質について闡明し、それをめぐる価値の問題についての論点整理を試みる。

References:

- 田中久美子（2010／2017 新装版）『記号と再帰：記号論の形式・プログラムの必然』，東京大学出版会
正村俊之（2014）『変貌する資本主義と現代社会：貨幣・神・情報』有斐閣
棕本輔（2019）『擬自律性はいかに生じるか』，河島茂生（編著）『AI 時代の「自律性」：未来の礎となる概念を再構築する』，勁草書房
他

※本研究発表の内容は、科学研究費助成研究（研究課題／領域番号：20K12553、研究種目：基盤研究(C)、
「機械と人間との感性および創造性の異同をめぐるネオ・サイバネティクス的研究」）による成果を含む